



トピックス

- 有機農業栽培体系の分類と特徴（その2）
- 「第4回公開セミナー 有機農業を基本から考える」を開催
- 「平成20年度 参入促進検討委員懇談会」を開催

www.ofrc.net

特定非営利活動法人
有機農業技術会議 事務局
発行責任者：藤田 正雄

有機農業栽培体系の分類と特徴（その2） 西村 和雄（有機農業技術会議代表）

有機農業（資材依存型から低投与型へ）

さて、資材の多投与は結果的に病虫害を引き起こす。この点、消費者でも「緑が濃くないと、虫が喰ってないと、有機農産物じゃないわ」と公言される御仁もいる。それは大きな間違いであって、ホンモノの有機農業ではそうはならない。現代農業から有機農業への転換中、すなわち土壌生態系が、あるいは圃場とそれを取り巻く自然環境からの自然生態系の流入が安定を取り戻してくると、圃場環境は一変する。耕耘したり、有機堆肥を投与したり、あるいは収穫物を得るために掘り返す。そのような攪乱を常に受けているわけだし、農作物そのものが野生植物とは遙かに違った性質に作り替えられているのだから、「自然生態系の回復といっても納得できない！」とおっしゃる方もいる。そこはそれ、攪乱を受けてはいるがそれなりの生態系が現出するのも事実なのである。

さて、現代農業から有機農業への移行段階では、ある期間、資材の多投与は否めないことがある。それは圃場生態系が安定するまでの期間、養分・ミネラルのバランスや土壌生物の回復を早めるために、一時的な多投与があっても致し方ないと考えている。しかし、移行段階をすぎて安定期にはいると、投与資材はかなりの量が減らせることも事実である。低投与型と呼称するゆえんでもある。投与資材を減らしても、作物に必要な養分はむしろ効果的に吸収され、効率がよくなるために、無駄な流亡や逸失は減少する。葉色は浅い緑色になり、作物は見違えるような健康な姿になる。健康な姿。それは病虫害からの脱出でもある。虫が付にくい。病気にかからない。人の健康状態と作物のそれとを同列に考えていただきたい。有機農業を実践している生産者や、農産物の供給を受けている、あるいは有機農産物を購入している消費者のあいだでは、常識的に言われている事実がある。それは、おいしい有機農産物には共通した特徴があることである。「切るとき堅くてバリバリ音がするほどだが、火を通すとすぐに柔らかくなる」というのだ。経験的に長い間言われてきたことだけに、それを無視することはできな

い。その意味では、同じく経験的に言われていることを解説してみよう。

葉色は薄い方がいい。決して葉色の濃さが美味しく良質の有機野菜を意味するものではない。それどころか、窒素不足でないかと思われるほどに葉色の薄い野菜が、ホンモノである。この場合、葉色が濃いのは決して葉緑素の多さを意味するものではないのだ。それが証拠に、葉色の濃い野菜を茹でると、茹で汁には明らかに葉緑素ではないと思われる黄色みを帯びた色が出てくる。そして、往々にして野菜の葉色が褪せてくる。ところが反対に葉色の薄い野菜を茹でると、茹で汁が染まらないばかりか、野菜の葉がより一層鮮やかな緑色になる。それがホンモノの有機野菜の証拠でもある、と同時に健康な野菜であることの証明でもある。市販の野菜が、すぐにジュルジュルに腐るのは当然のことながらホンモノではない。この段階の有機野菜があるとすれば、それはほとんどが多収を目指して堆肥成分や有機物、あるいはそれに準ずる資材をドカドカ投与している証拠でもある。これとは反対に、ドカドカ投与していないで生産された有機野菜は、腐りにくい。それだけでなく鮮度が良く、長持ちする。それがホンモノの証拠である。

事実、ホンモノの野菜を時々室内に放置したままにしておいても、腐ることはない。そればかりか、水分が次第に失われるだけで、まるで乾燥野菜のように萎れて縮んではしまいが、カビすら生えてこない。「そんなことがあるか？」と思われる御仁が多いとは思いますが、それはホンモノに出会っていないことを意味すると思っていただいてよい。この点、往々にして有機野菜というのが、ドカドカと資材を投与して、見栄えはいいが中身としての野菜の本質を備えていないのではないかと思う例が多すぎるのである。

さて、ホンモノの有機農産物には、もうひとつ際立った特徴がある。それは対称性など規則性の保存である。生物である以上、当然のこととは思うのだが、こうした事実は「農」の世界では、あまり顧みられることはなかったと言ってよい。それよりも、でかい農

産物、収量の多さ、緑の濃い野菜、外観の美しさを重視した品種、養分を多く与えればそれだけ応答して収量だけは立派な品種が求められた。

食味や、調理特性、そして何よりも健康であること

の意味を追い求めないままに、作物のメタボ的側面だけを重視した栽培方法が、いまだに反省されていない。これは、一部の有機農産物にも該当する事実である。
(その3へつづく)

「第4回公開セミナー 有機農業を基本から考える」を開催

「一般の農業関係のセミナーに比べて、若い人が多い」。昨年度とは異なり、出席が多かった地方自治体関係者の声である。

7月3日-4日、福島県農業総合センター多目的ホール（福島県郡山市）にて、講演、有機農業実証圃場見学、情報交流会および相談会を開催した。有機農業技術に係わる研究者・普及員・行政関係者および農業者など約200名が参加した。土づくりなど有機農業の基本技術や考え方とともに、福島県の取り組みを県および実施者の立場から紹介した。

講師および開催地の有機農業実施者を相談担当者とした相談会には15名の参加があり、新規就農や有機農

業栽培技術などについて相談を受けた。

セミナーの詳細は当日の資料集『有機農業を基本から考える』（1冊500円で頒布中）を参照されたい。



講演風景

計画されている相談会、交流会の開催日時・場所一覧

開催日時	開催場所	共催など
10月 4-5日	酪農学園大学（北海道江別市）	北海道の有機農業をすすめる会
10月 7-8日	島根県立大学（島根県浜田市）	
10月 25-26日	小川町立図書館（埼玉県小川町）	小川町有機農業推進協議会
11月 2日	ウォーターフロントパーク（鹿児島県鹿児島市）	オーガニックフェスタ実行委員会
11月 5日	オアシス21（愛知県名古屋市）	あいち有機農業推進ネットワーク

「平成20年度 参入促進検討委員懇談会」を開催

第1回参入促進検討会議を受けて、8月25日にKKRホテル仙台（仙台市）にて開催した。4月からの参入促進事業の実施内容の報告と、各委員の取り組みをもとに、意見交換を行った。地域有機農業推進事業（モデルタウン）の受託団体や地方自治体など有機農業への参入を進める取り組みが各地で行われていることが紹

介され、これらの団体と協力していくことの大切さが確認された。いっぽう、有機農業について、一般には知られていない。有機農業関係者で当然と思われることでも、様々な方法をもちいて広報していく必要があることも紹介された。

賛助会員募集のご案内

有機農業技術会議では、当会議の趣旨に賛同してくださる方を対象に賛助会員制度を設けております。会員の方々へは、電子メールによる機関誌や研究会などのご案内、研究会・研修会などへの割引参加、総合研究会への参加、ご意見・ご要望の反映などのサービスもあります。この機会に是非お申込みください。

お申し込みは技術会議事務局にご連絡ください。また当会議ウェブサイトwww.ofrc.netのホーム→入会案内からも用紙がダウンロードできます。皆様のご入会をお待ちしております。

NPO法人

有機農業技術会議事務局

〒390-1401

長野県東筑摩郡波田町5632

（財）自然農法国際研究

開発センター

農業試験場内

FAX:0263-92-6808

E-mail: office@ofrc.net

Website: www.ofrc.net